

20世紀最後の夏 土崎空襲を忘れまい

昭和二十年八月十四日の終戦前夜。土崎は午後十時三十分ごろから約四時間にわたり、米軍機による激しい爆撃を受けました。日本石油秋田製油所を標的にしたもので、投下された爆弾は約一万二千発。製油所周辺は真っ赤に燃え上がり、亡くなった市民は九十二人、負傷者は約二百人を数えました。戦争の時代だったともいえる二十世紀。悲しい出来事は二度と繰り返したくありません。



空襲を受けた日本石油秋田製油所

戦争の悲惨さ、 命の尊さを伝えたい

浅野喜代さん(76歳・土崎港南二丁目)

昭和二十年八月十四日の蒸し暑い夜。日本石油製油所を目標にした土崎空襲は、多くの民家や民衆を道連れにしました。百発爆弾の直撃を受けふっ飛んだ家や防空壕。逃げまどう大勢の人たちまでも犠牲になった空襲でした。当時私は二十一歳で、妊娠六か月。従姉たちと防空壕に避難し、ズシーンと腹にひびく炸裂音と振動に、「この子を死なせてはならない」と、下っ腹を押さえ縮んでいました。恐怖で力チカチ震える歯を必死で抑え、時折遠のく爆撃音の合間に外へ出て見た星も、「あれも敵機か」と生きた心地がしませんでした。

親戚一家六人が犠牲に

この空襲で、新城町(現土崎港西二丁目)の親戚一家六人が犠牲になりました。小学校六年生



土崎空襲を語り伝える浅野さん

の少年は、爆弾の破片で尻から太股へかけて大きく肉がえぐりとられ、夫たちが戸板で土崎南小学校へ運びました。校庭の松の木の下は、血と汗にまみれたおびただしい数の負傷者や死者でいっぱいだったといいます。結局この少年は、満足な手当を受けることもできず十日後に死にました。医師も看護婦も不足し、薬品はマキキユロだけ、包帯もなかったと聞いています。また、少年の母や兄妹五人は直撃弾で家もろとも吹き飛ばされました。五人の遺体は確認できず、八工が止まっている骨や肉片を誰のものかもわからないまま拾い集め、かめに入れ後日墓地に葬りました。

爆撃跡には、片腕や足首からそがれた足が転がっていたといいます。赤ん坊を背負った若い女性が、爆風で衣類をはぎ取られ胴体真っ二つになっていたことも、翌年の八月になって初めて夫が話してくれました。

12時間早く戦争が終わっていたら

「重大放送がある」と言われた八月十五日の正午。雑音の多いラジオで「天皇の玉音」を聞いても、敗戦と終戦を理解する気にはなれませんでした。もっと早く、十二時間だけ早く終戦の結論が出ていたら、「土崎がこのようなことにならなかつたらどうに……」。怒りとやるせなさ胸にこみあげました。

あれから五十五年、あの日、明日を知らずに失われたたたくさんの命を思います。生きていて良かったという思いと同時に、「命の尊さ」やこの「平和」がどんなに多くの犠牲のうえに築かれ、どんなに多くの努力のうえに保たれてきたのかを、戦争を知らない世代へ語り継いでいかねばならないと思います。